

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 105 号

平成23年1月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

<http://encounter.agape.gr.jp/>

相沢良一

「黒潮の神学 下巻」(黒潮社)より(8)

教会の本質と使命

5月21日の日曜日はペンテコステに当たります。このペンテコステというのは五旬節という意味で、イスラエルの人々の収穫感謝日でありました。この日に、イエスの弟子たちが一つ処に集まり、熱心に祈っていたところ、聖霊が弟子たちに与えられ、主イエスの死により絶望と恐怖の中にあつた弟子たちは、精神的・一大覚醒を与えられ、霊的な力に満たされ、信仰の勇者と変えられたのでした。

「ペテロは、ほかになお多くの言葉であかしをなし、人々に『この曲った時代から救われよ』と言って勧めた。そこで、彼の勧めの言葉を受け入れた者たちは、バプテスマを受けたが、その日、仲間に加わったものが三千人ほどあつた。そして一同はひたすら、使徒たちの教えを守り、信徒の交わりをなし、共にパンをさき、祈りをしていた」(使徒行伝2章22-42節参照)

このようにして、基督を信ずる集団が生まれて来ました。これがすなわち教会でした。そしてこの教会がどのようにして発展していったかという記録が、新約聖書の中にある使徒行伝と言う文書であ

ります。でありますから、聖霊のくだったこのペンテコステの日を、キリスト教会の誕生日、創立日として、クリスマス、イースターと同様に、大切な記念の日として、私たちは守っているわけでありませぬ。...

1億や2億も使い、大会場を借り、大音楽会を開き、大新聞に連日広告すれば、千人、万人の人は集まるかもしれません。人を集めるということよりは、キリストを信じた者がどのような生き方をしているか、今日この時代において、キリスト者はどのような信仰を告白して、その告白にふさわしい誠実な生き方をしているかを、身をもって証しすることにより、伝道のわざはなされてゆくものであります。統計とか数字をむやみと気にするのは、伝道の脱線ではないでしょうか。さいごに、教会はこの世に仕えるために、この世に置かれている集団であるということでありませぬ。この世のためにあります。この世の救いのために祈り、この世の福祉のために奉仕し、この世が間違ったゆき方をしているならば、真剣に警告を発する使命を与えられているのがキリストの教会であります。

こうした点で、教会は全く同じであります。都市の大教会も、われわれ農村の小教会も変わりはありません。私には昭和20年の時の思い出があります。

それは松田政一先生の牧しておられた中野同盟教会が、例の東京大空襲で灰燼に帰した時のことでした。一面の焼野原の跡に松田先生は掘立小屋を建てて、そこで礼拝を守っておられました。神学校を卒業して最初の礼拝説教をする光栄を与えられたのが実にその掘立小屋の中野同盟教会でした。講壇は林檎箱をひっくり返したものでした。座席は両側の石の上に板を渡しただけでした。松田先生と私とあと3人でした。それから私はわが大島教会に赴任をしたのでした。...あの粗末な掘立小屋、この立派な会堂、5人と百数十人。キリストの教会はそれによって左右されませぬ。 (61・5)

プロテスタントとカトリック

よくカトリックとプロテスタントの違いを一言で説明して欲しいと言われますが、一言ではとても説明が付きにくいのです。無理に言えば、カトリックは旧教で、プロテスタントは新教だ、とでも言う以外にありませんが、要するに、カトリック教会のゆき方に抗議して、キリスト教そのものを聖書の真理に立つキリスト教に改革したのが、プロテスタント教会だといったらよろしいでしょう。どちらも同じキリスト教であります。信仰の真理という点から考えると、6割くらい同じで、4割くらいはわれわれプロテスタントの側から考えると、どうしても受け入れられないものがあるのです。この4割ほどの異質的なまぜものを取り除き、純粋な聖書の信仰に引きもどそうとしたのが宗教改革運動であったわけであり。宗教改革の根本原理は、信仰義認、聖書主義、万人祭司主義の3点に要約されております。すなわち、われわれが救われるのは、ただ主イエス・キリストの十字架を信じる信仰だけで十分である。カトリックのように、人間の救いに善行功德というようなものはいっさい不要である。これが信仰義認という意味であります。

第2に、プロテスタントはカトリックのように法王とか、教職制度に信仰の最高権威を認めてはおりません。信仰の権威はどこまでも旧新約聖書だけです。

カトリックでは司祭と信徒の身分を区別しておりますが、プロテスタントにおいては、牧師も信徒も同じであります。神のみ前においては、ひとしく祭司の役目を与えられておる。これが万人祭司説であります。なお私自身どうしても腑に落ちないのは、カトリックでは聖母マリヤの無原罪受胎の教理を宣言し、マリヤ崇拝をすることです。わたしたちにとっての礼拝の対象は、どこまでも父・子・聖霊なる三位一体の神ご自身であって、たといマリヤが主イエスの母であったにしても、マリヤを聖母として崇拝することは、われわれには出来ないのです。...

教会の戦争責任

わたしたち日本基督教団はこの度、鈴木正久総会議長の名のもとに、次のような「第2次大戦下における日本キリスト教団の責任についての告白」文を、天下に公表いたしました。...

「わたしどもは、1966年10月、第14回教団総会において、教団創立25周年を記念いたしました。今やわたしどもの真剣な課題は「明日の教団」であります。わたしどもは、これを主題として、教団が日本および世界の将来に対して負っている光栄ある責任について考え、また祈りました。

まさにこのときにおいてこそ、私どもは、教団成立とそれに続く戦時下に、教団の名において犯したあやまちを、いま一度改めて自覚し、主の憐れみと隣人のゆるしを請い求めるものであります。...

「世の光」「地の潮」である教会は、あの戦争に同調すべきではありませんでした。まさに国を愛する故にこそ、キリスト者の良心的判断によって、祖国のあゆみに対し正しい判断をなすべきでありました。

しかるに私どもは、教団の名において、あの戦争を是認し、支持し、その勝利のために祈り努めることを、内外にむかって声明いたしました。

まことに私どもの祖国が罪をおかしたとき、私どもは「見張り」の使命をないがしろにいたしました。心の深い痛みをもって、この罪を懺悔し、主にゆるしを願うとともに、世界の、ことにアジアの諸国、そこにある教会と兄弟姉妹、またわが国の同胞に、心からのゆるしを請う次第であります。

終戦から20余年を経過し、私どもの愛する祖国は、今日多くの問題をはらむ世界の中であって、ふたたび憂慮すべき方向に向かっていくことを恐れます。この時点においてわたしどもは、教団がふたたびそのあやまちをくり返すことなく、日本と世界に負っている使命を正しく果たすことができるように、主の助けと導きを祈り求めつつ、明日にむかっての決意を表明するものであります。

1967年3月26日

日本基督教団総会議長

鈴木正久」

これはまさしく出るべくして出たものであります。これは教団の告白であると共に、また、このわたし自身の告白でもあります。

当時、神学生であったわたしは、学窓より中支の戦場に送られました。わたし自身「あの戦争を是認し、支持し、その勝利のために祈り努め」ひとりのクリスト者の兵士として、自分の任務を忠実に果たすことを心掛けました。

4年間の戦場生活で得たものは、聖戦などというものはあり得ない。戦争は人間を非人間化し、野獣のようにするだけのものだ、ということと、ことに当時の中国の不幸な民衆の運命についての心の痛みでありました。帰還後復学したわたしは、このことを学校で発表したことを覚えておりますが、ただそれだけの事で、敗戦まで戦争協力者として過してきたのであります。...

あの第2次大戦の下において、教会は「クリスト者の良心的判断によって」戦争を拒否し、この国の歩みに対して、完全とノウと叫んで戦うことができたでしょうか。今だからこそ「同調すべきではありませんでした」と声明ができて、その当時はお互い死を覚悟しなければ、到底なし得ない決断であったのであります。

自分のことを反省してみても、ほんとうに恥ずかしいことばかりでした。わたしはこのような一片の（もちろんその内容はじつに真摯であり、立派なものではありますが）声明だけで、自分の負い目が、良心が軽くなったとは少しも思えませんが、ただこのような戦争責任を正しく告白することによって「ふたたびそのあやまちをくりかえすことのない」ように、自分自身の決意を堅くすることが出来たことを、心より感謝をしております。...

(67・4)

続 日本における教会の再編成について

山谷省吾先生には『新約聖書解題』『パウロの神学』『基督教の起源』等の名著があり、ハルナックの『キリスト教の本質』、オットーの『聖なるもの』も翻訳され、筆者自身学生時代から今日まで、先生の学恩を深く感謝している次第である。

山谷先生の郷里は、岡山県の北西部に位置している人口1万ほどの農村である。先生は郷里を離れてから既に70年近くになるが、幼時をすごされた郷里が忘れられず、ここ10年ほどは毎度郷里に帰り、山河に親しみ、また郷里の教会の手伝いをするを、無上の喜びとしておられるとのことである。

先生の郷里の教会は、明治20年代には教勢も大いに伸び、信徒の意気も盛んであったらしい。ところがその後迫害も起き、教勢も次第に衰え、専任の牧師を招けず、80年の長い間を通じて、社会の変化に対応して、教会が自己を維持し、その使命を果たすことが困難になった。先生はこのような郷里の農村教会の現状に心を痛められ、『信徒の友』2月号に「わが郷里への祈り」と題して、今日の農村教会の実情を切々と訴えられたのである。それと共に先生は、筆者に懇篤なるお便りをよせられ、農村伝道についてのその意見を求められた。

たまたま、農村伝道神学校理事会の帰途、ようやくにして先生をお訪ねして、筆者自身平素抱いている農村教会の対応策を先生に申し上げた。筆者の考えは、既に本誌155号に「日本における教会の再編成」と題して、記述しておいたとおりである。

その具体的な例として考えられることは、山谷先生が東京において所属しておられる教会と、先生の郷里の教会とが合同されることである。...

われは聖霊を信ず

教会にとって三大節ともいうべき大切な三つの祝日があります。それは、クリスマスとイースター(復活節)とペンテコステ(聖霊降臨日)です。このペンテコステという言葉はギリシヤ語で、聖書では五旬節(五十日祭)と訳され、イスラエルの人々にとっては、収穫感謝祭の日にあたっていました。

主イエスの昇天後、失望落胆していた弟子たちは、この日に一つ所に集まり熱心に祈った結果、聖霊を受け、非常な力に満たされたのでした。この日を契機として、弟子たちはイエス・キリストの十字架の出来事の意味を啓示され、なにものにも怖れずに、力強くイエスはキリストであることを宣べ伝えました。このような弟子たちの働きによりイエス・キリストを信じる者の集団ができ、やがてその集団が教会とよばれるにいたったのです。...

このようなペンテコステの出来事は、遠い二千年もの昔の物語ではなくて、じつは今も、わたしたちの信仰生活において、くり返し起きている出来事でもあるのです。

聖霊がくだるということは、なににも神秘的な現象でもなければ、異状な宗教的現象でもありません。「また、聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』と言うことができない」(第1コリント12章3節)とあるとおり、イエス・キリストを告白するということが、なによりもたしかに聖霊の働きであるのです。

さらに、イエス・キリストを信じた者たちは、聖霊の恩化により「愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制」(ガラテヤ書5章22-23節)という徳目を身につけることができるように導かれるのです。使徒パウロは、このような徳目を「聖霊の実」というふうに表現しております。信仰が成長するというのは、祈りによって、聖霊の実をどれだけ多く結ぶかということにもかかわっているのです。

...

牧師のつとめ

熊本で開催される九州教区地方教会研究協議会に、講師としてお招きをいただいた。主題が「説教・牧会・伝道」となっていたので、ボンヘッファーの『説教と牧会』をテキストにした。...以下はこの書物からの抜粋である。

「聖書の研究のために、一日の中の最良の時間をそれにあてるべきである。説教者も時には、祈ることの出来ない状態に陥ちこむことがある。そのような時には、聖書をよく読み、思いをめぐらすが良い。説教の原稿は昼のうちに書きなさい。夜書いたものは、朝の光に耐え得ない。なお一気に書きおろさずに、しばらくの間をおくが良い。

よい準備がなされた時には、講壇では最高度の冷静さで説教がなされるものだ。準備不十分な説教だけが感情に訴えたり、絶叫したりする。説教者はたとい一日に4,5頁しか進まなくても、規則的に大部の神学的労作と取り組まなければならない。

説教は講壇の上で生まれるのである。聞く人の程度に応じて単純に語り、しかも彼に与えられた賜物に応じて説教する人は、聞く人に大きな霊的・精神的な感銘を与えることができる。たいせつなことは、当たり前前に語ることだ。...

牧師は出来るだけ墓地を訪ねるが良い。そのことは彼自身にとって、彼の宣教と牧会のつとめにとって、さらには彼の神学にとって有益なのである。...

牧師の生活は読書、思想、祈り、研鑽において実現される。中心となるのは聖書のことばであり、すべてはそこから始まり、そこに帰る。われわれは聖書の言葉によって心が動かされるように読まねばならぬ。聖書の言葉は教会のため、兄弟たちのため、仕事のため、自分の魂のための祈りにまで導く。

われわれは牧師としての仕事の成果をみることは出来ないかもしれない。しかし宣教と奉仕のわざにおいて生きているのだという確信があれば、それだけでじゅうぶんではないか。 (76.7)

キリスト教と日本

石原謙先生の文化勲章受章の対象になった大著『キリスト教の源流』『キリスト教の展開』は、じつに先生 91 歳の著作であった。先生はいまから 10 年前、脳出血で倒れ半身不随になられた。その中からこのような大著が生まれたのである。...

この度、日本基督教団出版局から『キリスト教と日本』と題する書物が刊行された。これは 74 年から 75 年にかけて、石原先生と松村克己、中川秀恭両氏との 6 回にわたる対談である。...

「もう万葉の時代から、日本人の性格が現われている。外来の思想に対してとった態度、その時から外来の思想が日本に来て、日本に植えつけられたのではなくて「日本化」した。つまり日本が変わったのではなくて、仏教を変えてしまったのだということ。キリスト教に対しても同じことが言えるのではないかと思います。」...いずれの宗教においても、強烈な個性をとおして、その宗教は土着化の道をたどる。日本におけるプロテスタント・キリスト教 100 年の歴史の中で、もっとも個性的な人物として、無教会の内村鑑三と教会形成派の植村正久があげられるであろう。西欧社会は、キリスト教世界になるまでには、2000 年もかかった。日本はまだ 100 年をいくらかも出ていない。石原先生は「一步一步、そのキリスト教の本質を理解するために、努力してゆくならば、その努力をかさねて少しずつは近づいてゆくことができる。何世紀かかるかわからないけれども、500 年なり 1000 年なり後には、日本もやっぱりキリスト教世界ということを実現するようになるかも知れない」としながらも「今の情勢からみると、この方向に進んでいるように感じられない」と言われる。

しかし筆者はわが教会に対し、大いなる期待と希望を与えられているのである。小なりといえども、大島にわが教会が存在していると言う事実が、われわれにとっての希望の根拠である。30 年、80 年はまだほんの序の口ではないか。これから 200 年、300 年、500 年、あるいは 1000 年かかるかもしれない。...焦ることもなければ、慌てることもないのである。

(76・9)

永世中立論

元同志社大学学長、憲法学者の田畑忍先生がこの度『非戦・永世中立論』を上梓された。その諸論の概要を紹介させていただく。...

わが国の憲法第9条は、戦後にあらわれた平和主義政策の中では、最も徹底したものである。参考のため憲法9条を摘記する。

「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。」

こうした永久にして絶対の戦争放棄の条項には、当然に永世中立の理念が入っていなければならなかったはずである。オーストリアがそうであった如くに、被占領の状態から独立する時に、わが国の政府または国会は、この憲法第9条に従って永世中立の宣言をして、各国にこれを承認することを求める外交的手続きを取るべきであった。この手続きをとらなかつたため、日本は各国から高度の安全を保障されるに至らなかつた。...それのみならず、日本は昭和26年、憲法9条に違反して、米国と軍事同盟を結び、米国の軍事基地化を許してしまったのである。これは永世中立とはまことに反対の政治路線である。現在日本の安全は危険な状態において、米国によってのみ保障され、しかもその保証もあてにはならない。昭和29年には、26年の安保条約を補足するM S A軍事協定が成立、さらに35年にはそれが改悪され、現行の新安保条約になった。...

日米安全保障条約が、このように日本の運命を狂わしてしまったのだ。日本はもはや平和主義の国家ではなく、戦争主義体制の国家になりさがつたのである。そこで田畑氏は、これからの課題として、永世中立を実現するため、国民の健全にして圧倒的な平和的政治意識と、憲法意識とを政治に反映させる国民的運動、努力を重ねること以外にないことを指摘されるのである。 (81.3)

松本廣先生と講解説教

このたび新教出版社より、松本廣先生の『コリント前書講解説教』が刊行の運びと相成った。...この講解説教は、先生が西千葉教会在任中の晩年の講壇で、1年半にわたって語られたものである。...その中で先生は次のように語っておられる。

「...何故日本キリスト教団の教会で受洗者が少ないか。その理由を明言すれば、ケリュグマ（宣教）的な説教が欠けているからである。十字架を高く掲げ、復活を力強く語り、ここにこそ救いがあることを伝えて人々に肉薄するような、ケリュグマ的な説教が欠けている。そこからは救われる者は多く起こされることはないのである。牧会的な訓練は一生懸命なされている。ディダケー（教説）的な説教は絶えず語られている。それも大切なことであるが、説教がそれに偏ってしまえば、救われる者は乏しくなってしまう。

説教に対するこの反省は、私自身の反省である。先日私の牧会生活の五十年の祝いがあり、大島元村教会の相沢良一牧師が説教をして下さった。その中で相沢牧師は次のように語った。『松本牧師の説教を、15,6歳の少年の頃聞いた時には、伝道説教が非常に肉迫的で力があった。しかし現在、松本牧師は講解説教が非常に円熟し、見事である』。この言葉を聞いて、私は深く反省させられている。もっとケリュグマ的な説教を語らなければならない。イエス・キリストの十字架をあからさまに語らなくてはならない。パウロのように、十字架につけられたイエス・キリストが目前に描き出されるほどの、力あるケリュグマ的な説教を自分も語らねばならないと反省しているのである。」...

講解説教の中にも、このケリュグマとディダケーは併存しなければならない。説教をとおして、福音は述べ伝えられ、同時に教義は懇切に教えられなければならない。...

このような素晴らしい講解説教が語られたのも、偏えに西千葉教会の講壇なればこそである。講解説教とは語る者と聞く者との、きわめて勝れた共同作業のわざである。 (85.4)